見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

October 2026 vol.150

October
S M T W T F S
1 2 3
4 5 6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29 30 31

◆西来寺（さいらいじ）

所在地：三重県津市乙部
交　通：近鉄名古屋線「津新町」駅 東 約 2km

明応地震は、応仁の乱 (1467 ～ 1477 年) を経て戦国時代に突入した明応 7(1498) 年 8 月 25 日に発生した南海トラフの地震で、M8.2 ～ 8.4 程度とされ、特に津波の被害の記録が多く残されています。駿河湾沿岸や伊勢湾沿岸では 10m 近い津波が押し寄せ、溺死者は伊勢・志摩で 1 万人、静岡県志太郡では 2 万 6 千人にのぼったとされています。この地震で、浜名湖の今切口が形成されたとも言われています。

三重県の津にも、明応地震の津波の威力を物語るエピソードが残されています。津のまちの中心は、かつては安濃津と呼ばれた沿岸部にありました。安濃津の湊は博多津や堺津とともに三津に数えられ、伊勢神宮への参詣や物資輸送の基地として発展し、国際的な港町となっていました。しかしながら、安濃津は明応地震により壊滅的な被害を受けます。津波に襲われた安濃津では、港湾機能や町そのものが完全に消失し、住民は内陸へ移転、16 世紀初頭から 18 世紀初頭にかけて、歴史的空白期となります。その荒廃した様子は、大永 2(1522) 年に当地を訪れた連歌師・宗長の『宗長日記』に、「十数年前（明応地震）から荒野と化し、4,000 ～ 5,000 軒あった人家の影はなく、ただ寺の堂塔の跡だけが残るばかりである。浅茅やヨモギが生い茂る草むらとなり、鶏や犬の姿も見えず、鳴くカラスさえ滅多に見かけないほど寂れてしまっている。」と記されています。

安濃津の被害の記録は、明応地震の津波の後に内陸部へ移転した西来寺の寺誌にも残されています。『龍宝山西来寺誌』には、「寺地遷　明応七年午の六月の大地震に、元津の寺社・民屋、ことごとく皆海嘯と鳴りぬ、ここにより、津を阿漕浦古墳の西に遷す、故に当寺の境地も倶に彼地に遷す、寺院阿漕に在ること八十一年、天正六寅年、今津に遷す」と記され、安濃津の町の内陸部への移転に合わせて、西来寺も現在地に移転したことが読み取れます。

さらには、付近で行われた遺跡発掘調査から、津波堆積物も発見されています。平成 8(1996) 年にみえ夢学園高等学校の建設に伴って行われた調査では、地下 2m ほどの深さに、最大 80cm にも及ぶ褐色砂層が見つかりました。これが、明応地震の津波で伊勢湾から押し寄せた砂であると想定されています。褐色砂層の下の層には、室町時代後期のものとされる生活用品などが含まれ、これに明応地震で運ばれた砂層が覆いかぶさり、歴史的な空白期を経て、復興が始まった江戸時代中期の地層が重なっているものと考えられています。（地層断面の様子は下記 web サイト参照）

明応地震は、その時代背景などから、江戸時代以降の地震に比べ記録が不十分な面がありますが、こうした記録から、とりわけ津波の規模の大きな地震であった可能性が指摘されています。



西来寺
提供：(一社) 中部地域づくり協会

災と Seeing（28）明応地震
（http://www.cck-chubusaigai.jp/sai_seeing/detail_28.html）もぜひ併せてご覧ください。





◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

● 東観音寺 (vol.42,2017.10)

所在地：豊橋市小松原町

交　通：JR 東海道本線「二川」駅 南 約 5km

古来、渥美半島の太平洋岸に連なる海食崖の下の浜辺には伊勢神宮へとつながる伊勢街道が通っており、街道沿いに多くの集落があったと伝えられています。東観音寺は、この伊勢街道沿いの小松原村を治めていた寺で、江戸時代初期（宝永地震以前）の「東観音寺古境内図」には、東観音寺があった付近の海岸には伊勢街道が通り、町屋が建ち並ぶ様子が残されており、もともとは東観音寺がこの伊勢街道の近く、海食崖の下に立地していたことがわかります。

宝永 4(1707) 年の宝永地震の津波により大きな被害を受けた東観音寺は、正徳 3(1713) 年までに海岸から北に約 2km 離れた現在の地に移転をしています。小松原海岸の雑木林の中の移転前の東観音寺の跡地には、「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が残されています。移転の様子は、江戸時代の「小松原村絵図」からもうかがい知ることができます。

宝永地震の津波では、東観音寺以外にも海食崖の下の伊勢街道沿いの集落で多くの被害が発生し、伊勢街道は壊滅的な打撃を受け、多くの寺院・神社が海食崖の上の高台に移転しています。こうした高台への移転による津波対策は、宝永地震から約 150 年後の嘉永 7(1854) 年の安政東海地震の際に大きな効果を発揮し、安政東海地震の津波で被害を受けたとされる社寺は 2 社寺にとどまっています。

このような災害に対する備えの成功事例は、現代の防災を考える上で大変参考になる事例であり、災害に対する教訓の伝承として、もっと積極的に伝えられるべきものであると言えるのではないでしょうか。



◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.42（https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html）をご覧ください。

★ 安濃津よさこい

安濃津よさこいは、毎年 10 月に津まつりに合わせて開催される大規模なよさこい祭りです。（2026 年は 10 月 10 日（土）11 日（日））平成 10 年に始まり、現在では東海地方を代表するよさこい祭りのひとつとして、全国から多数のよさこいチームが集まり、ステージ演舞やパレード演舞を披露します。

会場は津市中心部に複数設けられ、商店街や公園、広場などが演舞の舞台となります。出場者による演舞は土曜から始まり、夕方からは前年ファイナリストらによるサタデーナイトステージが繰り広げられます。日曜には、市内の小中学校のマーチングバンド、地域の伝統芸能などとともに、よさこいチームの演舞が披露される大パレードが催され、審査はファイナルへと進み、大賞が決定します。



安濃津よさこい HP より

～自動車で巡る～

近鉄道路は、1961 年に廃止された近鉄伊勢線の廃線跡を活用した道路で、津市から松阪市を結ぶ生活道路です。

津市中心部では、概ね東西南北に直線の道路が張り巡らされる中、南東にカーブを描く独特のルートを通っています（表面地図参照）。岩田川に架かる津興橋は、鉄道橋を道路橋へ転用したものでしたが、老朽化対策や利便性向上などのため架け替えられ、2025 年から幅員の広い新橋となっています。

●ブレイクタイム●

♪ 津観音

津観音（恵日山観音寺大宝院）は、三重県津市大門にある真言宗醍醐派の古刹で、浅草観音（浅草寺）、大須観音と並ぶ、日本三大観音の一つとして知られています。江戸時代には伊勢参りの参拝者でにぎわい、「津に参らねば片参り」といわれるほど信仰を集めました。県内唯一の木造五重塔や数多くの文化財を有し、津まつりなど地域行事の中心として市民に親しまれています。周辺には、平次煎餅や蜂蜜まん、フルーツ大福など、津ならではのグルメスポットがあり、グルメ巡りをすることもできます。



photo AC より

◆ この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災と Seeing』のホームページ（https://www.saitoseeing2020.jp/）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター　2026 年 10 月）